

「女姿と三輪の神」ふたたび

石井倫子

〔三輪〕の後シテは「女姿と三輪の神」すなわち女体で玄寶の前に現れ、「思へば伊勢と三輪の神、一体分身のおんこと、今さらなにを磐座や」と天照太神の天岩戸隠れを再現してみせるにもかかわらず、「クセ」で語られる三輪山伝説では三輪明神は女の許に夜な夜な通う男神となっている。このような三輪明神の性の揺らぎは、〔三輪〕の主題歌ともいべき「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉立てる門」〔古今集』雑下・982)を三輪明神の詠とする和歌説話の世界でも早くから問題とされてきた。たとえば『袖中抄』で三輪の歌枕「しるしの杉」について顕昭は次のように語る。

わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひきませ杉立てる門

……世人これは三輪明神の御歌と申すめれど、慥に知りがたし。その由も記されず。たゞ三輪の山のはとりに住みける人の詠めりけるなめり。この歌を本にて、しるしの杉といふ事をば詠みならはしたる

にこそ。或は三輪の明神住吉のおほむもとへかよひ給ける間に、

すみよしのきしもせざらむものゆゑに
ねたくや人にまつといはれむ

と詠み給へる歌をば、拾遺抄には、この歌住吉明神の御託宣と記したれば、三輪をとこ神にておはしますと聞こえ、住吉は女神と聞こゆ。又神功皇后伐新羅御之時、住吉は大将軍、日吉は副將軍、三千法施しげきによりて、日吉位まさり給よし江記に侍り。これらの心を思へば住吉をとこ神歟。今のとぶらひきませの歌を、三輪の明神、住吉の明神に奉り給へる御歌と申すめれば、女神と三輪をも可申歟。両社の男女不審なればとかく申しがたし……。(傍線は私に付す)

これに続けて顕昭はさまざまな説を参看しながら考察を進めていくのだが、結局「又前説には男神と聞こゆ。後説には女神と聞こゆ。極不審なり」と匙を投げた体である。

〔三輪〕の後シテをめぐっては、巫女に三輪

明神が神憑った状態とみる西村聡氏「能『三輪』考」〔皇學館論叢』12-2)にはじまり、中世日本紀に伝える三輪明神女体説や天照太神との一体説から読み解こうとする小田幸子氏「作品研究『三輪』」〔観世』48-9)や新潮日本古典集成『謡曲集』(下)伊藤正義氏の同曲解題、そして三輪明神の性別が「待つ女」という伝統的な和歌手法からの影響を受けたがために揺らぎ続けたことを指摘し、単なる女神ではなく男女一対の夫婦神と理解する必要性を説く田中貴子氏「女神考―謡曲『三輪』における神の性」〔日本の美学』21)などの諸論者があり、現在では、三輪明神女体説は中世の人々にとつて容易に受け入れられるものであり、神の苦悩を女性の罪障と重ね合わせて描き出すため女神としての設定が必要とされたという考え方が一般的である。

しかしながら、「女体の神とおぼしくて、玉の簪玉葛の、なほ懸け添へて葛葛の、這ひ纏はるる小忌衣」と女神姿の葛城の神が現れる〔葛城〕とは異なり、〔三輪〕の後シテが「禪掛け帯ひき替えて、ただ祝子が著すなる、烏帽子狩衣裳裾の上に掛け」と巫女出立で描かれている点にもう少し重きを置いてみたい気がする。能作者の狙いはさて置き、観客が後シテに巫女の姿をみたとしても不思議ではないし、むしろその方が自然のように思われるからである。

飯泉健司氏は「三輪山伝承考―神の子」と

巫女―(『古事記研究大系』8)で『古事記』の三輪山伝承を「三輪山の神の嫁となる巫女が、巫女となるにあたって、三輪山の本質・正体を明かし、祭祀を行うようになった、そんな祭祀起源譚である」とし、これを「神明かし」の伝承として位置づけている。「女姿と三輪の神」と(三輪)の後シテが己の素性を明かすとき、そこにはいしえの「神明かし」伝承の痕跡が微かに顔を覗かせている。

サテモ齋宮ハ、皇太神宮ノ后宮ニ准給テ、夜々御カヨヒ有ニ、齋宮ノ御衾ノ下へ、朝毎ニ蛇ノイロコ落侍ヘリナント申人有。本説ヲホツカナク侍リ。俗云、此事人常ニ尋申事也。太タ不実也。

〔通海参詣記〕

神宮祭主大中原氏出身の醍醐寺僧である通海は、伊勢参詣の折に耳にした、齋宮にまつわる『日本書紀』の箸墓伝説を思わせるスキヤンダラスな噂を書き留めている。中世においては天照太神と齋宮の關係に三輪型神婚説話と同質の説話が投影され、齋宮が神に通われる従属的な神妻となつていったという岡野治子氏の指摘(『女と男の時空』3所収「アマテラスのイメージ・王権・女性」)を考え合わせると、(三輪)の「クセ」においても天照太神に仕える齋宮のイメージが自ずとオーバードラップすることになる。

一、申樂、神代の始まりと云は、天照太神、天の岩戸に籠り給ひし時、天下常

闇に成しに、八百万の神達、天の香具山に集り、大神の御心をとらんとて、神樂を奏し、細男を始め給ふ。中にも、天の細女の尊、進み出で給て、榊の枝に幣を付て、声を上げ、火処焼、踏み轟かし、神憑りすと、歌ひ舞奏で給ふ。その御声ひそかに聞えければ、大神、岩戸を少し開き給ふ。国土又明白たり。神達の御面白かりけり。其時の御遊び、申樂の始めと、云々。くはしくは口伝にあるべし。

〔風姿花伝〕第四神儀云

世阿弥が『古本別紙口伝』や『拾玉得花』で繰り返し「面白」の語源説を語ることからもわかるように、天岩戸神話は猿樂のルーツと分ちがたく結びつく大切な物語であつた。

一、日本国に於いては、欽明天皇の御宇に、大和国初瀬の河に洪水の折節、河上より一の壺流れ下る。三輪の杉の鳥居のほとりにて、雲客此壺を取る。中にみどり子あり。かたち柔和にして玉のごとし。是、降人なるがゆへに、内裏に奏聞す。其夜、御門の御夢にみどり子の云、「我はこれ、大國秦始皇の再誕なり。日域に機縁ありて今現在す」と云。御門奇特に思しめし、殿上にめさる。成人に従ひて、才智人に越え、年十五にて大臣の位に上り、秦の(姓)を下さる。秦といふ文字「はだ」なるがゆへに、秦河勝是也。(同右)

そして三輪の「しるしの杉」もまた、猿樂の祖と仰がれる秦河勝が「みどり子」として姿を現した場所にはかならない。天岩戸神話や三輪の杉にまつわる右のような伝承に(三輪)の作者が無自覚であつたとは考えがたい。

三輪流神道の祖とされる慶田と三輪明神との印信授受すなわち「互為灌頂」的構図が(三輪)の玄資と三輪明神との關係に通ずるといふ指摘もある通り(嶋秀記氏「謡曲(三輪)考―玄資を中心に」『国学院大学大学院文学研究科論集』23)、抜苦を願ひ玄資の前に姿を現した三輪明神が語る神代の物語は確かに衆生濟度の方便としての懺悔の物語的な機能を持つてはいるし、三輪明神の向こう側に透けて見える天照太神もまた、仏の救済を求めなくてはならない存在として描かれてはいる。しかし、いつしか天岩戸の神樂舞の中にすべてが昇華され、そこでは神の苦惱さえもが「常闇の雲晴れて」しまつたかのような印象を受けるのである。「女神の救済という当初掲げられた目的が、天岩戸神話の再現という異なつた次元へと一気になだれ込んでしまう結末」(田中氏前掲論文)は、(三輪)に巧みにすべりこまされているもうひとつのテーマ「猿樂起源伝承へのオマージュ」により、然るべくしてもたらされたのであつた。

(日本女子大学助教授)